様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１９７

研究課題名（和文）パリからニューヨークの表象へ　アメリカにおける新印象派の受容と展開

研究課題名（英文）From Paris to New York: The Reception and Development of Neo-Impressionism in America

研究代表者
坂上　桂子（SAKAGAMI, Keiko）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：９０３８６５６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は19世紀後半のフランスから20世紀前半のアメリカ美術の流れを、「都市」を切り口に、その影響関係を考慮しながら研究したものである。パリではナポレオン三世の統治下、セーヌ県知事オスマンが手がけた都市の大改造により生まれた近代都市とそこでのライフスタイルは、印象派や新印象派の画家たちにとって、新しい主題や様式を生み出す大きな着想源となった。一方、これら一連のフランス美術は、アメリカの画家たちにより積極的に学ばれ受容されたが、それはニューヨークの都市表象の主題にどのように反映されていったのか。パリからニューヨークの表象へと、都市への感心がいかに引き継がれ、展開されたのかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　アメリカにおけるフランス印象派や新印象派の受容の問題は、アメリカ美術が20世紀以降、世界の美術を牽引する前衛美術を生み出していったことを考慮したとき、その出発点としてとても重要な課題といえる。とはいえアメリカにおけるフランス美術の受容は、これまで指摘こそされてきたものの、他方でアメリカ美術における独自性を強調することで、あまり積極的には研究されてこなかった傾向にある。そこで本研究はこの問題について取り上げたが、とりわけ「都市」を切り口にしたことに意味がある。これにより美術史的視点に加え、現代社会が抱える環境や災害など、都市の重要な諸問題への関心と結びつく考察となった。

研究成果の概要（英文）：　This research examines the trends in art from the late 19th century in France to the early 20th century in America, taking into account the influence of the "representation of cities." In Paris, the modern city and the lifestyle that emerged from the major urban renovations undertaken by Haussmann, the prefect of the Seine, under the rule of Napoleon III, became a major source of inspiration for Impressionist and Neo-Impressionist painters, creating new themes and styles. Meanwhile, this series of French art was actively studied and accepted by American painters, but how was this reflected in the themes of New York's urban representation? This research examines how interest in cities was passed on and developed from Paris to the representation of New York.

研究分野：美術史

キーワード：都市　近代絵画　パリ　ニューヨーク　印象派　新印象派

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 19 世紀後半、オスマンが行ったパリの大改造により出現した新しい都市は、画家たちの大きな着想源となり、とくに印象派や新印象派の画家たちは、パリを主題とした作品を数多く生み出した。20 世紀初頭、同様にアメリカでは、建物の高層化など都市開発が急速に発達するなかで、ニューヨークを主題にした一連の絵画が創造されたが、その多くはパリで学んできた画家たちによるものだった。このように、都市の表象はパリからニューヨークへと引き継がれたが、アメリカの画家たちは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、都市表象に限らず、印象派やポスト印象派をはじめとするフランス美術を少なからず参照したと考えられる。ところが、その影響関係については必ずしも十分に研究されているとはいえない。20 世紀初頭のアメリカ美術に関わる研究では、フランスからの影響よりも、アメリカにおける独自性がむしろ強調されてきたからであり、とくに新印象派からの影響に関する研究はほとんどないといえる。

(2) 都市を主題にした作品は、近代絵画において少なからず見出せる。印象派の画家たちの作例には、郊外の田園風景とともにパリを主題にしたものが多く、近代都市の出現と絵画の関連性は明らかである。近代都市の形成は、人びとのライフスタイルを大きく変容させたが、これらの作品では、近代都市がもたらした様々な要素が浮き彫りにされている。また、近代都市を主題とした絵では、インフラ整備、環境、貧困、災害など、現代都市が抱える問題をも同時にすでに描写している。そのため、近代都市と絵画の問題に関する研究は、美術史的な関心にとどまらず、現代の社会的視点をも持ちえる課題となる。

２．研究の目的

(1) ニューヨークという都市の創造とそのイメージの生成について明らかにする。
20 世紀初頭におけるニューヨークの都市表象について、その全体像を把握することが本研究における第一の目的である。代表的な画家の作品を調査対象とするが、いわゆる印象派の画家に留まらず、リアリズムの作家をはじめ、多様なスタイルの画家たちの作品を検討することで、幅広い視野を得、総合的にニューヨークの都市のイメージを把握するものとする。

(2) ニューヨークの都市表象に関し、フランス美術からの影響について検討する。
アメリカの画家たちの作品を、フランスの印象派、さらには新印象派の画家たちが描いた作例と比較検討することで、パリの表象とニューヨークの表象の類似や相違点を見出し、それぞれの都市表象の特徴を明らかにする。

(3) 近代絵画における都市表象の問題を総合的に検討する。

３．研究の方法

(1) 19 世紀末から 20 世紀初頭のニューヨークを描いた作例として、チャイルド・ハッサム、ウィリアム・グラッケンズ、モーリス・プレンダーガスト、ウィラード・メトカフ、ロバート・ヘンライ、ジョージ・ラクス、ジョン・スローンの作品を中心に検討する。

① フランス美術との関連性からの検討
彼らがニューヨークの主題を扱うようになった経緯とともに、フランス美術との接点を具体的に見出し、そこから何を吸収し、何を展開させていったのかをていねいに分析していく。

② 主題と内容についての検討
ニューヨークを主題とした作品を、通り、街並み、建物、公園、市場、乗り物といったモティーフごとに分類し、都市の情景や人々の暮らしのなかで、何が浮き彫りにされているのかを明らかにする。

③様式と技法についての検討
作品の様式的特徴をつかむため、構図、タッチ、色彩などについて、とくに印象派と新印象派の技法との関連から分析する。

(2) ニューヨークを表象した作例を、印象派およびポスト印象派のパリを主題とした作例と比較検討する。印象派としてはクロード・モネ、オーギュスト・ルノワール、カミーユ・ピサロ、ギュスターヴ・カイユボット、ベルト・モリゾを中心に扱う。また新印象派の画家としてはジョルジュ・スーラ、ポール・シニャック、マクシミリアン・リュスらの作品をとりあげ都市表象の

特徴を検討する。さらに、エドゥアール・マネやフィンセント・ファン・ゴッホなどについても視野に入れる。これらの作家について、アメリカの画家たちがいかに関心を抱いていたかを具体的な作品に見出す。

（3）アメリカの美術館におけるコレクションの状況に関し、調べ、分析する。アメリカの主な美術館でフランス印象派およびアメリカの印象派たちの作品をコレクションした経緯と時期について、展覧会の開催や批評などを通じて調査する。

（4）研究代表者の個人的研究に加え、19 世紀フランス美術、および 20 世紀アメリカ美術を扱う研究者の協力を得て、パリとニューヨークの都市と美術に関わる問題について、研究会の開催などを通し情報提供してもらい、互いに議論するとともに検討する。

４．研究成果

（1）19 世紀末から 20 世紀初頭にニューヨークを表象した画家として、本研究ではとくにハッサム、グラッケンズ、スローンの 3 人を中心に、作品を具体的に分析し、そこで表象されているイメージについて考察を行った。とくにフランス美術の受容と展開、さらにはアメリカ美術の独自性について検討した。

（2）本研究課題のまとめとして、『近代都市と絵画　パリからニューヨークへ』（坂上桂子編 水声社　2024 年）を刊行した。本書は、研究代表者の研究成果に加え、19 世紀から 20 世紀のフランス美術とアメリカ美術を研究する専門家の協力を得て実現した。これにより、パリとニューヨークに関する近代都市と美術の問題を幅広い視野で捉えることができた。本書の章立てと内容は以下のとおりである。

第 1 章「印象派のパリ―モネ、ルノワール、カイユボットらが描くオスマンのパリ」（坂上桂子著）では、印象派の代表的画家をとりあげ、オスマンのパリ大改造により整備された都市インフラを、画家たちがいかに見たかを検討した。印象派の美術を、近代代都市が生み出した新しい芸術として捉え、彼らの美術のなかに都市との関連性を見出している。

第 2 章「無秩序なるパリ―ピエール・ボナールのクリシー広場」（吉村真著）は、ナビ派の画家ボナールが描いたクリシー広場の主題をめぐり考察を展開している。パリを数多く描いた「都市の画家」としてのボナール論となっているが、同時に、オスマンの都市整備におけるポイントともなった広場という場所性について考察した論ともなっている。

第 3 章「モーリス・ドニとパリの表象―二十世紀の公共建築装飾にみる都市」（森万由子著）は、ナビ派を代表する画家ドニと都市表象をめぐる論考である。ここではドニが公共建造物を装飾する作品のなかで、パリのモティーフを多く取りあげていることに着目し、描かれたモティーフを詳細に分析しドニの都市への関心を読み解いている。

第 4 章「マリー・ローランサンとパリの外国人コレクターたち―収集家の動向から読み解く画家の魅力」（由良茉委著）では、ローランサンが 20 世紀初頭のパリという、豊かな芸術的背景のなかで、いかにコレクターや多彩な画家たちと交流しながら活動を行ったかを明らかにしたもので、芸術都市としてのパリを浮き彫りにした論考である。

第 5 章「ニューヨークの表象―パリからニューヨークへ」（坂上桂子著）は、19 世紀から 20 世紀初期におけるニューヨークの表象を、ハッサム、スローン、グラッケンズという 3 人の代表的画家のなかに見出したものである。フランス美術の影響とともに、アメリカ独自のアイデンティティの表現の確立を見出している。

第 6 章「ジョージア・オキーフ作《ラジエター・ビルディング―夜、ニューヨーク》についての一考察―1920 年代の芸術家の交流を手掛かりとして」（玉井貴子著）は、ニューヨークをよく描いた画家、オキーフの代表作をとりあげ論じたものである。同時に写真家スティーグリッツら当時の前衛芸術家たちの交流関係にも目が向けられている。

第 7 章「岡田謙三の『抽象』―パリとニューヨークの経験を中心に」（誉田あゆみ著）は、パリとニューヨークをともに描いた日本人アーティスト岡田謙三についての論考で、画家が「抽象」に行きつく過程を検証したものである。両都市の背景が、その芸術活動や創造にいかにかかわったかを論じている。

第 8 章「河原温〈Today〉シリーズの再考――一九六六年の《ジャーナル》の解読をつうじて」（桝田倫広著）は、戦後ニューヨークで活動した日本人アーティストの代表作について、資料を詳細に読み取って、作品の背景を調査したものである。それにより、本作に、単なる「作家の生

きた証」というだけではなく、「都市の表象」を見出そうとした論考である。

以上、本書においては、「パリ」と「ニューヨーク」の 19 世紀後半から 20 世紀初頭における都市表象からさらに視野を広げ、同時代の都市における芸術に関わる人的交流、さらには、20 世紀後半に至る美術の展開までを見晴らすことができたといえる。すなわち、より大きな文脈のなかに本研究課題を組み込むことができたと考えられ、この点は本書を刊行したことによる大きな成果であった。

また研究成果を、こうした形で多くの人たちに向けて一般公開することができたのは何よりの成果であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 坂上桂子編	４．発行年 2024年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 250
３．書名 近代都市と絵画	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関